

---

# 鈴 -RIN-

琉璃華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鈴 - R I N -

### 【Nコード】

N 4 7 0 9 0

### 【作者名】

琉璃華

### 【あらすじ】

ある夏、私は肝試しで  
不思議な女の人と出会う。

その人の名前は鈴<sup>りん</sup>

## 鈴の音

「藍那　！！早く来ないと知らないよ　??」  
「ちよ、ちよっと待って!!」

夏の暗い山の中、  
懐中電灯の光が05つあつた。

前に04つ、後ろに01つ。

その後ろで1人、寂しく歩いているのが  
私、よしむらあいな吉村藍那。

夜っただけで暗いのに  
周りに木があるせいか  
さらに暗いように感じた。

「はあ…。なんで肝試しなんかやるのかね」

そう言つて私はため息をついた。

私たちの高校では  
あることが噂になっていた。

夜中に学校のすぐ近くの山、  
つまりこの山の奥にある  
古くて小さな神社に行くと

狐のお化けが出るやら出ないやら…。

この噂が本当かどうか確かめるため  
私たちは今ここにいます。

「あ、あれじゃない？」

「うげ…気持ち悪い…」

前を歩いてきた四人が立ち止まり、  
懐中電灯で前の方を照らす。

私は見えなくてもなんとなくわかった。  
そこに神社があることが。

私は少し足を早めてみんなの元へ急いだ。

「うーわ…気味悪い…」

私は神社の姿を視界に入れた瞬間  
ヤバいと思った。

なんていうんだろう…

神社の周りだけ  
空気が違うような気がする。

ヤバイ…

それしか言いようがない。

私は一歩後退りした。

「よし…やるか。」

順番にお参りしていくぞ。

何か起こったならあれを使え、いいな？」

みんなは黙って頷いた。

正直もう帰りたい。

絶対この雰囲気…出る。

「まずは俺かな」

クラスのお調子者、晃佑こうすけが  
神社の方へ足を進める。

私を含めた他四人は  
黙って晃佑の背中を見つめる。

だんだん晃佑の背中が見えにくくなり  
私たちは必死に目を凝らして晃佑を見る。

晃佑は賽銭箱のところで立ち止まり  
用意していたお金を賽銭箱にいれて  
駆け足で戻ってきた。

これだけのことなのに  
とても長く感じた。

「なんともなかったぞ？」

狐の霊なんてほんとにいるのか？」

つまらなさそうに晃佑が言った。  
さっきまでビビってた奴がよく言うよ...

私が苦笑いしていると  
隣の女の子、奈美<sup>なみ</sup>が前に出た。

「いやいや、いるでしょ　！！  
あたしが行ってみてくる！！」

そう言うつと懐中電灯を神社の方に向け  
ずかずかと前に進んでいく。

みんな啞然としていた。

女の子とは思えない：

奈美はお金を放り込み、  
周りを見渡してから  
回れ右をして帰ってきた。

「確かになんにもなかったや〜」

ガツカリしながら奈美が言う。

私は出たらやばいと思うよ、うん。

私がつめ息をついていると  
紗理奈が肩に手をおいた。

「とりあえず一人ずつ行ってみよ？  
時間経ったら出てくるかもしれないし…」

いや、だから私は出てほしくな…

「そうだね。次だれ？」

なんかもうみんな怖さなんて  
どこかにいつてしまっていた。

私一人だけまたため息をついた。

一人、また一人と神社に行き、  
お金を入れて、戻ってきた。

紗理奈が駆け足で戻ってきて  
ついに私の番が回ってきた。

「藍那、最後なんだから  
ちよつと長めに見てきてね!!」

奈美が楽しそうに私に言った。  
あー…もう泣きたい…

「はいはい…」

適当に返事をして神社に向かう。  
みんなは期待しながら私を見送った。

神社に近づくにつれて  
姿がはつきり見えてきた。

とても小さな神社で、  
鳥居の近くには狐の像が  
道を挟んで2体置かれている。

狐の像と目を合わせるだけで怖かった。

賽銭箱の前に立ち、  
お金を入れて目をつむり手を合わせる。

はあ…

絶対私たちバチ当たるって…

あーまぢごめんなさい…

そう思ったそのときだった。

チリーン…チリーン…

私は驚いて顔を上げて  
あたりを見渡した。

何今の？

鈴…？



チリーン…チリーン…

たしかにまた鈴の音が聞こえた。  
小さかったけど間違いない。

「…誰かいるの？」

後ろを振り返りながら

誰も居ないはずのところに聞いてみる。

「きゃー！！！」

「！？？」

返事の代わりに叫び声が聞こえた。

みんなの方を見ると

鳥居のそばに白く光る物体が二つ。

そう、像の狐の霊だ。

やっぱり居たんだ…

ヤバイ、どうしよう

「みんな！！ 塩だ！！

塩を投げるんだ！！」

晃佑が必死に叫ぶ。

私たちはここに来る前に  
各自、塩を持ってきていた。

みんな持ってきた塩を狐に投げる。

…でもなんにも起こらなかった。

「ちょ、ちよつと…」

どうすんのよこれ…」

奈美が半泣きになって

もう一人の男の子、大輝にしがみつく。

「どうするって…」

逃げるしかないだろ…！」

そう言つて瞬間

みんなは元来た道を戻ろうとする。

しかしそんな簡単に帰れるわけがない。

二匹の狐は一瞬で移動し、  
道をふさいでいた。

「！！」

くそ…」

さっきよりも狐との距離が近くなり  
みんな後ろに下がった。

私はいきなりすぎて  
動くことができずにいた。

ただ呆然とみんなを見てるだけ。

何をすればいいのかわからなかった。

迷ってるうちに

みんなは狐に距離をつめられて行く。

いつの間にかみんな黙って  
体を動かせずにいた。

これって金縛り…？

どうしよう…

なんとかしなきゃ…！！

私はみんなのところへ走った。

どうやってこの霊を追い払うとか  
どうやってみんなを助けるとか  
そんなことは全く考えてない。

でも一瞬なら金縛りを  
解くことぐらいできるかも…。

そう思って走り、  
みんなの姿がはっきり見えたときだった。

「止まって…」。

この子達を追い払うのは  
私の仕事…。」

私は驚いて立ち止まり、  
声が聞こえた方を見てみる。

そこにはいつの間に現れたのか  
赤衣着物を来た女の人が立っていた。

長くて真っ黒な髪を  
だんごにして1つにまとめ、  
背中には剣をかついでいた。

相当髪が長いのだろうか  
だんごからまだ髪が出ており、  
その髪は風でなびいている。

そしてかんざしをしており、  
そこには鈴が2つついていた。

女の方は黙って剣を抜き、  
剣の先を狐に向けた。

「…成仏しなさい」

女の方は確かにそう言った。

そして言った瞬間、狐の前に移動し、

狐の顔に剣を突き刺した。

チリンと鈴の音が鳴り響く。

「ギイ　！！！！」

刺された狐は耳をつんざくような  
声をあげて消えていった。

「す、すごい…」

女の方はすぐにもう一匹の方に  
剣の先を向ける。

剣を向けられた狐は  
唸るのをやめ、その場に座り込んだ。

それはまるで  
主人に従う犬のようだった。

その姿を見た女の方は剣をしまい、  
狐の前まで歩いていき、  
優しく狐の頭を撫でた。

すると狐の姿は薄くなり、  
しばらくするとその姿はなくなっていた。

助かった…

私はへなへなと

その場に座り込んでしまった。

「ねえ」

いきなり上から声が降ってきた。

私はビクツとして顔を上に上げる。

さっきまでなかった女の人の姿が  
今日の前にあった。

女の人は上から

私を不思議そうに見つめる。

「な、なんででしょう?」

少しビクビクしながら言った。

この人が普通の人じゃないことは  
さっきのを見てわかつている。

でもなぜだか怖くなかった。

ただ何者かわからないから  
普通にしゃべれない。

女の方はしゃがみ、  
私に視線を合わせた。

近くで見ると

肌が白くてとても綺麗だ。

「なぜあなたは動けるの？」

「…え？」

なぜこんなことを聞くのか

全くわからない私は

何も答えることができなかった。

無言の私を見て、

女の人は首を傾げた。

「今私は『この世の時間』を止めてるの。

だからあの子達は止まっている。

なのにあなたは普通に動けている。

どうして？」

あなたはこの世の人間でしょ？」

「ま…まあ…」

というかこの人は一体何？

時間を止めてるって…

しかも『この世の時間』？

意味がわからない…

女の人は立ち上がり

ニコツと笑った。

「あなたみたいいな人初めてだわ。  
気に入った。」

お話しでしょ？

あなたも私のこと知りたいでしょう？」

「はあ……」

勝手に話が進んでるような気がする……  
私どうなるの？

「大丈夫、みんなは家に帰しておくわ。  
さ、行きましょう」

女の人は手を差し出してきた。

私は少し戸惑ったけど  
私もこの人のことが知りたい。  
どうなってるのか知りたい。

私は手を握り、立ち上がった。

「あ、名前言ってなかったわね。  
私の名前は鈴<sup>りん</sup>。  
よろしくね？」

鈴はそう言ってまた笑った。  
かんざしの鈴がまた音を鳴らして揺れた。



## 誘い

私が鈴に連れられてやってきたのは  
さっきの神社の中。

見た目はボロボロなのに  
中に入ってみると意外と綺麗だった。

綺麗というか別世界って言った方が  
あってるかもしれない。

中は畳で、蝋燭があり、  
それが明かりになっていた。  
あとは座布団があるだけで  
ほかは何もない。

これも鈴の力なのかな？

「ここ座って」

鈴は一番入り口に近い座布団に  
座るように言った。

言われた通りに黙って座る。

そして向かい合うようにして  
鈴が座った。

なんか落ち着かないなあ…

「そんな緊張しなくてもいいのに」

鈴は背中の剣を磨きながら言った。

そんなことを言われると

余計に緊張してしまう。

「はあ…」

曖昧な返事をする

鈴は思い出したように顔を上げた。

「そういえばあなたの名前は？」

「…へ？」

「なま えっ

いつまでもあなたって呼ばれるのは  
気持ち悪いでしょう？」

お、おっしゃる通りです…

「よ、吉村藍那です…」

私は小声で言った。

でも周りが静かなせいか  
自分でもよく聞こえる。

「藍那…いい名前ね」

そう言うとまた鈴はフツと笑う。

鈴のこの笑い顔を見ると  
不思議と安心してしまう。

やっと緊張が解けた気がした。

ふう〜と息をはいて  
肩の力をぬいた。

「どうしてあんなことしたの？」  
「…え？」

また肩に力が入る。

一瞬何のことを言っているのか  
わからなかった。

「神社で遊んでたでしょ？」  
「あ…」

そうだった。

いろんなことが起こりすぎて  
私は今までの出来事を  
忘れてしまっていた。

私はゆっくり話し始める。

「学校の噂でこの山に

お化けが出るって聞いて  
本当に出るのか確かめに来たの。  
そしたら…あんなことに…」

私はなぜか下を向いてしまう。

怒られるような気がして  
鈴の目を見るのが怖かった。

「そう…」。

でもあなた…いや、藍那は  
来たくて来たわけじゃないみたいね。」

「！！…なんで…」

私は驚いて顔を上げた。

顔を上げると鈴の笑った顔が  
視界に入ってきた。

確かに本当のことというと  
私はこんなところ来たくなかった。

あんなくだらないこととしても  
なんの得にもならない。

それでもここに来た理由…

いや、連れてこられた理由って  
言っただ方が正しいかも。

「霊の姿が見えるみたいね。」

鈴は静かにそう言った。

そう、私は霊が見える。

だからあの子たちに連れてこられた。

最初は嫌だったけど

逃げるのはもつと嫌だったから

最終的に自分で着いていったけどね。

…あれ？

でもなんで鈴は知ってるの？

「なんでそのことを…」

私がそう言つと鈴は目を丸くした。

「なんでって…」

私のこと見えてるじゃない。

それに私には霊力が見える。

藍那を見たときすぐわかったわ。」

鈴は呆れたように言った。

そしてそれを聞いた私は変に納得した。

やっぱり鈴って…

「霊…なの？」

「なにをいまさら!!  
わかってるくせに」  
まあそこらへんの奴とは  
少し違うけどね」

あー…やっぱり…  
霊ですよね…

私は苦笑いするしかなかった。

でも『少し違う』って  
どうということなんだろう。

「今まで見てきた霊、  
さっきの狐と違うところない？」

鈴は剣を磨く手を止めずに  
私に問いかけた。

今までと違うところ…

気になっていることは確かにある。

…今聞くしかない。

「…なんで鈴はそんなに  
生きてる人間に近いの？」

さっきまで気になっていたこと…  
それは鈴は生きてるみたいだということ。

私が今まで見てきた霊は  
いかにも死人という感じがしていた。

でも鈴は違う。

生きてる人間そのもの。  
でも霊だという。

不思議でたまらなかった。

鈴は剣を床におくと  
私の目を真っ直ぐ見た。

「正解。

私は霊をあの世に帰すのが仕事なの。  
だから普通の霊とは違って  
この世の人間に近い。  
あの世とこの世の間の人間って  
とこかしらね」

鈴は笑って言った。

霊を帰す…

そんな仕事あるんだ…

というか頭の中が  
ごちゃごちゃになってきた。

私がポカーンとしていると

鈴はそうだ！！と言って手を叩いた。

「ねえ、藍那

仕事手伝ってくれない？」

「……え？」

…今なんとおっしゃいました？

「最近仕事が多くて大変なのよ。

大丈夫、戦い方は教えてあげるし、  
武器だってあげるわ。

だからお願い！！」

そう言つて鈴は頭を下げた。

この人何してんのおおお

「ちょ、ちよつと待つて！！  
頭上げて！！　ね！？」

私は立ち上がつて

とりあえず鈴に頭を上げさせた。

鈴は真剣な表情で私を見る。

「今日藍那に会つたのも

何かの縁だと思ふの！！

藍那みたいな強い霊力を持つてる子  
そんなにいないわ！！」



鈴は必死に言う。

でも私は

どうしたらいいのかわからない。

霊を帰すなんてできない…

「わ、私にはそんなこと…」

「大丈夫！！ 私がいるわ！！」

なんだろう

鈴が必死すぎて

怖くなってきた…

こんなに言われると

断りづらい…

「と、とりあえず落ち着いて？」

私はなんとかして鈴を座らせる。

鈴はごめんなさいと言って

落ち着いてくれた。

「なんで私なの？」

「私じゃなくても他にも…」

「私の姿をハッキリ見たのは  
藍那、あなただけなの」

鈴は私の言葉を遮って言った。

私かというと

驚いて言葉が出なかった。

鈴の目が真剣だったから。

今まで真剣じゃなかったわけじゃない。  
でもさつきとは違った。

「こんな仕事 そこらへんの人間に

ほいほい頼まないわ。

…というか頼めない。

私が姿をできるだけ隠してるからね。

でもあなたは私が見えている。

それは霊力が高い証拠。

だから頼んでるのよ。

霊の数が増えすぎて

私一人じゃ無理なの。

だから…お願い。」

私の目の前で

また鈴は頭を下げた。

さつきとは違って静かに。

「鈴、顔あげて？」

鈴はゆっくり顔を上げる。

私、決めた。

「私やってみるよ、その仕事」

その言葉を聞いた鈴の顔は明るくなり、それをみた私も自然に笑顔になった。

今日会ったばかりで

しかも相手は霊で、

いきなりこんなことを頼んできて  
普通なら断るだろう…

でも私にしかできないのなら…

私にしか霊を救えないというのなら

私は、やる。

「嬉しいわ!!」

「じゃあじい様に報告しないとね!!」

じ、じい様…?

鈴のおじいさん?

ってことは…

私の顔は強ばった。

「じい様!!」

「助っ人ですよ」

鈴は部屋の隅のほうに話しかけた。

どんな人なんだろ…  
きつといかついんだろうな…  
ああ…怖い

はあ…と私がため息をついたときだった。

「話は聞いておつたよ。  
まったくお前は…  
会ったばかりの娘に  
こんなことを頼みよつて…」

奥の方から声が聞こえ、  
少し顔をあげると黒い物体が見えた。

ああ、これがじい様…  
案外かわいらし……

え？

「ね、ねこおおおお！？」

私の目の前には黒猫がいた。  
猫がしゃべってる…

叫ばずにはいらなかった。

「わしはヤマトじゃ。  
まあお前さんもじいと呼んでも  
ええがのう」

そう言って黒猫…いや  
じい様は笑った。

私はもう苦笑いしかできない。

今年の夏は

驚くことばかりになりそうです…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4709o/>

---

鈴 -RIN-

2010年11月12日00時43分発行